

札幌の農業を守り、元気に。

新鮮な食材を食卓に提供するなど私たちの生活に潤いを与えてくれる札幌の農業。

しかし、近年農地の減少や担い手不足など、取り巻く環境は必ずしも楽観できるものではありません。

そんな中、農業を元気にしようと頑張っている人たちがいます。

受講仲間の 前向きな姿に 「自分も負けられない いぞ」という気に



北区・村田 征一さん

「さつぽろ農学校」

目的はさまざまながら、何らかの形で農業にかかわりたいという方を応援するため、市が平成十三年度から開催している講座が「さつぽろ農学校」です。

講義や実習を通じて栽培の基礎知識や技術を身に付ける基礎コースに加え、十四年度からは、その修了生を対象に、より本格的に農業を学ぶ「就農コース」を開設。昨春秋、二十四人の皆さんが足掛け二年の課程を終了しました。

北区新琴似にお住まいの村田 征一さんもその一人。「先祖

から受け継いだ農地を自分の手で守りたい。そのためには、新しい作物や品種にも対応できる知識を体系的に身に付けなければと思いました」と受講の動機を語ります。村田さんの家は、明治から続く野菜農家。ご自身はサラリーマンでしたが、六年前、定年退職を機に、父親から農業を引き継ぎました。村田さんの代になつてからは、従来のジャガイモ、パセリ、カボチャなどに加え、西洋料理で使われるウリ科の野菜「ズッキーニ」など、新しい作物の栽培にも取り組んでいきます。

農学校の修了生の中には、市民向けの農業体験事業でボランティアとして活躍する道を選んだ方もいれば、未経験の状態から始めて、就農した方もいます。「うとうとう農地を手に入れた！」と喜んでいた仲間の顔が印象的でした。自分も負けてはいられないという気になりました」

住宅地の中にある村田さんの畑には、新鮮な食材を求めて飲食店やスーパーなどの関係者が訪ねてくることも多いそうです。「多くの人口を抱える札幌の農業を盛り上げるカギは、とれたての野菜を直接食卓に届けるための仕組みづくりにあると思います」と村田さん。「市民はもちろん観光客にも野菜の本場のおいしさを知ってもらいたいですね。」

今年の抱負？ 去年初めて収穫して、レストランにも卸したアスパラと、農学校でみっちり教わったトマトに力を入れますよ」と話してくれました。



就農、ボランティア活動など、それぞれの目的で農業を真剣に学ぶ受講生の皆さん



昨年9月にさとらんどで行われた「さとの収穫祭」では、実習でとれた農産物を受講生が販売しました